

2―自由意志を束縛しない



(1) 対談―「老人の主体性をめぐって」

老人ホーム処遇の専門誌『老人生活研究』は、老人ホームで老人の主体性が果たして護られているかというテーマで、長期のキャンペーンをした。森幹郎教授（当時奈良女子大）と小生の対談（61年9・10・11・12の各月号連載）もその一環であった。その中の一節「生きがい」（10月号）をめぐる部分を再掲し、お年よりの自由意志を考える素材にしよう（文意を損じない範囲で一部省略）。老人ホームの現場評価についての双方の見解は必ずしも一致していない。そして、そのこと自体が実は重要なことである。

▼生きがい

森　そもそも、老人ホームっていうのは、生きる意欲がなくなった老人を教育し、老人に生

きる意欲を与えるところですかね。

吉田 本質的な意味で、ただ本人の生きるがままに生かすところ。

森 そうですよ。でも先生のおっしゃることと、してることは……。

吉田 私の言う意味は、生命の流れにそうて支えるということです。生命の流れはしかし、必ずしも順調とはかぎらず、オールドオールドでは独りでは生き難く、風声鶴唳、不安の中にいるのです。だから、無言なりに心身両面での支えを求めているととらえるべきです。歌をうたうことしか残っていないような年寄りもおるんですよ。うたっているときは真剣にうたっています。うたわされたのじゃない。うたうはずみを与えなきゃいけないけれどもね、放っとけば黙っていますよ。

司会 はずみを与えるというのは、たとえばどういうことをするのですか。

吉田 たとえばカラオケをかけて、うたう人はどうぞと、「あんたうたいたくない」というんじゃないかね。状況だけは豊富につくっておかないといけないのじゃないですか。そのへんは放っとくということとは違います。オーバーにならないように、もちろん強制にならないように、状況だけは豊富につくっておく。

たとえば落書き帳をホールに置いといたら、誰かれなしに書いてあるわけです。そこで、指導員が日記を書ける人には書いてもらおうと、大きな画用紙を渡している。しっかりした人だけを書くとはきまっていますませんけれど、寝たきりの人もかなり多く書いています。

字が書けんからと字の練習をしている人もいる。非常にハードワークな日記運動が、運動という強制を感じるかもしれませんが、知的作業をやってるわけですよ。私はこれは大事なことだと思っている。強制できるものではないですよ。できなかった者が、ひとつの奨励によって、臨終に近い者までもが参加しているということです。これは何なのかな。日記Ⅱ自己表現、それは生命そのものの躍動です。

書くことにひとつの自己課題を感じている。私は、人間というのは死ぬまで自分の課題をもっているものだと思う。自己課題を持つとは自己であり続けたい願望といっぴい。自己であり続けることはよりよき自己をめざす、よりよく生きることです。そういう構造が人間存在です。

森

老人が自由に時間を過ごすための条件、状況を老人ホームの側で十分に設定しておくことは大切ですね。しかし、いま先生のおっしゃった具体例は、私のいう状況の設定とは違って、課題の提供ということになるのではないのでしょうか。先生は、日記書きは強制しない、と言っておられるのですが、奨励はしていらいっしやるんです。その場合、いくら奨励だといっても、職員と老人との関係からすると、心理的な強制になるのじゃないかと思うんだけれども。いま話題になっている生きる意欲というのは、多分に教育的な機能じゃないかと思うんです。

もし老人ホームが教育的機能をもとうとすると、それは老人ホームではないんじゃない

かと思ひます。例えば、先程、先生は日記の奨励についておっしゃいましたが、それなど、私の眼には、教育じゃないかと思はれるんですが。日記書きという課題を職員が与えておられるんですから。老人ホームで人生観を教育するなんてことは飛んでもないことだと思う。教育者としての吉田先生に、そのことのご意見をぜひお聞きしたいのです。

吉田

老人は自分の生き方を貫くようにすべきで、老人は教育されるものじゃないということ
は森先生と同じです。『人生観を教育する』なんて、僕の言葉にも考えにもない。ただ人間である限りは、死ぬまで自己を規制するもの、自分に何かの課題をもって生きていると思う。その課題をもつお年寄りの支え、手助けが、ぼくは晩年にこそ必要じゃないかなと思います。たとえば、良寛が、「若い人は心弱きものぞ、みこころを慰めたまえ朝な夕なに」と、年寄りの心を慰め支えてくれと、自らを含めて言っているわけです。老年期こそ、いわゆる物理的、生理的ニーズ以上に、ホームではそれらは充たされているけれども、心の支えや慰めを求めているのだということは、相当強烈に言えるんじゃないかと思う。支え、慰めるということは、人生観をはたから注入することではなく、くず折れようとする心を外から励まし支えることです。老年ぎりぎりの願望とはこの支え慰めの一点に帰す。ひと皆が支えを必要とする、まして老人をやである。木樹にそれぞれ枝振りがあるように、ひとにそれぞれの命ぶりがある。そのままそれを容認することも大切な支えです。

第二点、福祉の中での教育を否定されるが、教育とは相手の中の重要なものを引き出す

役目です。自己表出のお手伝いです。今の学校を教育と考えると、真の教育が見えなくなる。本当の教育なら、まともな人間関係であれば常に存在する。教育のない人間関係はない。福祉に教育を入れるなどといっても、教育的なものを人間関係から排除できるものではない。それは老人どうしが学びあい、寮母にまなび、寮母は老人に学んでいるからである。教えあうのではなく、学びあうのである。

ただ、教育作用が相手に教育を感じさせるようでは本ものではない。無言の薫陶が教育の理想の姿です。そうなると、そこにはもはや教育の姿は見えないから、いかにも教育はないというふうにもみえる。

森 いまのお話を聞いて、二つのことを感じました。まず第一は、何を人生の自己課題にしていくかということは、人格形成期の十代にはほぼ決まってしまうことだと思う。しかし、三十代、四十代、五十代になっても自己課題が何かも分からないままに年をとってしまったという老人が老人ホームには少なくありません。だからと言って、その老人にあなたの自己課題を確立しなさいと言うのは、おかしいことだし、また、無理なことだと思うの。

吉田 いや、森さんは自己課題を、何かひとつの人生目標のように捉えているでしょうけれども、自分の死んだ親のことを考えるのも自己課題だし、あるいは、自分の子供や孫のことを考えるのも自己課題であるわけです。

森 そう？ 本当？ もし先生がそう言われるのであれば、老人は、職員がいっしょうけんめい

にやっている生きがい活動にも参画しなくなっていていいわけでしょ。

吉田 そりゃ、そうです。

森 それならいいんです。だけど、さっきはそうおっしゃらなかったように思ったもんですから…。

吉田 生きているということは、精神的にも生きているということで、精神活動というものは死ぬまであるわけですから、それを支えてあげなくては。

森 それから、お話を聞いての第二の感想ですが、良寛の歌をお出しになりましたが、今の老人ホームには、指導員の中に、「支えてやる」からおれの言うようにしなさい、というふうな姿勢が見られるのです。良寛の言う「慰め給え」というのは、それとは違うんじゃないかしら？

吉田 慰め給えというのは支えておくれということで、支えるというのは、相手の側に立ってみるということです。

森 おれに頼ったら支えになるよ、さあ、おれにまかしとけ、というのが熱心な職員の姿勢でしょ！ だからクラブ活動や行事を熱心にやるんですね。そこにあるのは、職員の支えというより、老人の寄りかかりじゃないですか。老人は自分の主体性を放棄し、職員に寄りかかり、職員に同一化されちゃう。そのような形によって解決されちゃってるわけです。

吉田 こちらが寄っていかなくちゃいけない。相手が見えてこなければならぬ。

森　　そうですね。そういう姿勢が今の日本の老人ホームの活動の中にあるのか、私は聞いたのです。

自由意志の尊重

お年よを抑えつける。叱る。非難する。威圧する。こんなことはいかなる場合もあってはならない。しかし、残念ながら、老人ホームではしばしば目にする。だから、私は「施設は恐い」と自己反省をこめて常に言ってきた。こうした粗暴な行為（一斉総参加運動なども含めて）は討論の余地もなく、自由の圧殺で、老人ホームの存在を根底から否定するものである。

では具体的に、自由意志を束縛しないとはどういうことか。いや、積極的に自由意志を尊重するとはどういうことか。対談の中で「任運荘の日記書き」が話題になっているので、それを再び例にしよう。結論から先に言って、日記書きのすすめは自由意志の束縛でも何でもなく、真実の意味で自由意志の発揚であり、尊重である。書くも書かないも全くの自由である。進んで言う、老人ホームで、日記を書くことなどすっかり忘れていた、だのに書く人には帳面を用意しますと言われて、では、書いてみよう、となっているにすぎない。

ここには打算のありようもない、ごく自由な心の動きである。何の足しにもならん、あほらしくて書けんと思う人もいよう。それもそうだ、と私たちも思う。これもある、あれもある、

というふうに状況を設定したにすぎない。選び決定するのはお年より本人だけの力である。物質的にも精神的にも何も設定せず、放任することこそ、自由意志の軽視である。

「選択」なし

有料等のデラックスなホームを除くと、老人ホームのほとんどが、設備的にも運営実態も、入所者の自由意志をのびのびと発現させることに極めて貧しい。物心両面において限りなく貧しい。だから、自由の発現のために、いらん世話をしないで欲しい、ほっといてくれといって、そうしてもらったからとて、自由があるはずがない。耐える、忍ぶ自由だけの不自由があるだけである。自由の発現のためには、もっともっと物的条件が用意されねばならず、精神的条件も慎重に用意配慮されていなければならない。

任運荘で最も悲しいことは、お年よりが時間を過ごすために選択する条件が、余りにも少ないということである。ほんの少しの宛てがいぶちかないことを、私はお年よりと共に悲しむ。冬であれば、もう六時頃にはベッドでまどろむ。何もすることができず、何もすることがないからである。「もう寝るんな」というお年よりの言葉は余りにも悲痛である。事務長は集居室にテレビの点け放しをして、一人でも見に来るお年よりを待っているが、やっと、一人だけ七時のニュースを見に来ている。「選択」のない暮らしが象徴されているようだ。

くり返すが、何もないところには、自由もない。だから、貧しくとも、何か物を用意しよう。

物が無理なら、心を用意しよう、それらが少しずつ増えることは、自由が増えることである。

日記を付けることも、日記帳を用意することや、付けるきっかけ、雰囲気を用意するという物心両面があつてのことである。私は日記に拘りすぎたようだが、もう少し考えてみよう。

助産婦の如く

日記書きは五十九年に始まり、四年がすぎた。初めは九人が自力で書き（うち四人はすでに病人）、寮母に手伝わせて書き付けす人が十一人いた。四年間の病死老衰等で減少し、現在続いている人は六人。ひとがするから自分も書きたいと要求する重度のぼけさんが二人。新入所者が二人。

これらの人たちは独りなら書くこともなかったであろう。隣がするからするのであり、持続もしている。つまり、老人ホームにいるからこそしているのである。自由意志の構造を見る場合、このことは重要である。

ホームの中だからできる。ホームの中だから、させられている。同一のものがかく二様に考えられるということは、自由についての把握に大きな隔たりがあるということである。老衰者でもきっかけを与えられ、きっかけをつかんで、日記書きをする。これを単純に教育された人、即ち主体性を奪われた存在と見ることはできない。

人間が主体的であるということは、自己表現を生きるということである。日記は自己表現、

自己主張の最たるもの。だから、自己表現のお手伝いである。それを主体性の無視と考えることは、自己表現の途を閉ざし、妨げ、見んふりをすることに繋がりがかねない。

老いては欲求も弱まり、自己表現を弱めるが、無くなることではない。多くの状況を用意して、それを助け、手引きする。お手伝いする。ソクラテスはこのことを産婆術（助産の仕事）とよんだ。自己表現のお手伝いである。その人の真に生きゆくためのお手伝いである。

(2) あるがままに生きるとは

老いはすべなし

木樹にそれぞれの枝振りがあるように、人間にもそれぞれの生命^{いのち}ぶりがある。老いてなお日記をつける人も、日記などとてもと思う人も、ひとそれぞれの好みでごくふつうのことである。前者を特別のこと、異常のことと考える必要はない。

気楽に人生を、日記などばからしいと思うことも、ごく自然の情である。ルッソーはとくにそれを「自然」と呼んだ。生理的なさまざまな欲求、安楽安全、快の欲求、それらは自然な根源的なもので、最も尊重されねばならない。しかし、あるがままに生きるとは、この根源的欲求のままだと決めてしまうとすれば、それは人間に対する浅薄な見方である。

人間は欲求の束といわれる。常に多くの欲求から何れかを選んで充たしてゆくのが人生である。選ぶということは人間が自由であることである。自由があるから選べるのである。人間の本質は自由であり、選択する力である。その自由を充たしゆく道程に、満足、不満、後悔、努力、絶望等の起伏動揺絶え間ない。当然、老年に至ってもその構造に変わりはない。

しかし、老いざる日は、人は己が主体性の動揺からも、それへの他の侵害からも己を守り、遠ざけることもできる。その苦悩を忘却することもできる。主体性の断絶という死の観念をもまぎらわして通り過ごせる。

病いと障がいを伴侶とする老年に至るとき、人は独力、素手でいかに生くべきかとの課題に直面させられる。老いとは喪失の時代に外ならないから、「かにかくに術^{すべ}なきものは老いにぞありける」(良寛)。する術、方法をどんどん失っていく。だから、欲望を小さくし、控えめにし、ぎりぎりの線まで切り下げる。残るものは何か。ある意味では、ただ人間として生きんとする純なる願望を抱くに至るであらう。

それだけに、支えや助けを最も切望する時期である。助けなくして主体性は危ない。老年は危機的存在である。また、良寛の歌を、「老いびとは心弱きものぞみ心をなぐさめたまへ朝な夕なに」——老年の切なる願いをかく代弁し、彼また自らの晩年をそう乞い願ったであらう。

ある老婦人の願いがある。「年よりはことばがほしいの／もの言うたら返事してや／言うたこと忘れて／また言うて／うるさいやろけど／返事してや。」

言葉が返ってくることに切実な願いがこめられている。かく、慰めは老人の主體的に生きるための絶対条件である。

任運荘の副施設長北崎ハツ子のホームヘルパー時代の手記を見よう。

老人の部屋は春でも底冷えがし、夏はむし風呂のように暑い。夏の週二回の訪問のお世話の主なものは行水である。狭い庭にタライを置き、老人はまず髪を洗い次に体中をていねいに洗わせる。「年をとって少なくなったが、昔は髪を結うとこれでも、もてたんじゃ。」老人は洗い終わり、部屋でうちわで風を入れている。汗びっしょりになった私は残り湯を捨てるのがもったいなく、思わず足を洗った。すると老人が急に声をあげて泣き出した。自分の体を洗った湯で足を洗ったのが癪にさわったのかと、あわててわびる。

「いいんじゃ、わしのような年寄りの汚れ湯で足を洗うてくれた。それがうれしいんじやよ」とまた泣く。私は思わず「おばあちゃん」と、その肩を抱きしめた。

（『続老人たちと共に』・老人生活研究所刊・「任運臈々」の章）

人間性こそ

老婆は手助けを必要としている。いま思いがけなくも、単なる手助けでなく、人間としての手助けがあったのである。人間性があった。求めているものは人間性であり、与えられたもの

も同じく人間性であった。だから、泣けてしまったのである。

人間は単に生きるのではなく、人間として生き、また、そう生きられるよう助けを求めている。人間として生きんとすること、人間性でつながりあおうとすること、これ自然である。ルッソーはそれを人間の中の自然と言い、良心とも言い換えている。彼が「自然に従え」と言うとき、良心にしたがえということであり、いわば第二の自然に従えということである。このルッソーを深く敬愛したカントは、「天上の輝く星とわが心のうちなる道徳律」と謳い、良心は星よりも明らかにわが中に存在すると言った。

この第二の自然は人間の中に深く明確に存している。それはよりよく生きんとする力、人間に成りゆく自己創造力である。日記を書こうとする意志はこの自然、第二の自然である。人間は意識を残すかぎり、死につくまで、この自然と良心と共にある存在である。

下村湖人はこのことを次のように平易に説明している。

「私は元来、人間には二つの自然があると思います。その一つは、食欲とか親子の愛情とかいったような、普通にいうところの自然でありまして、もう一つは理想であります。理想も人間であるかぎり、程度の差こそあれ、必ずその心におのずから芽ばえるものでありますから、これも一種の自然であります。前者をかりに『第一の自然』と名づけますならば、後者は『第二の自然』ともいうべきものでありましょう。この両者は、ともに重んぜられなければなりません。そして教育といい政治といい、そのほか人間の営みのすべては、この第一の自然に即し

つつ第二の自然を実現してゆく努力であります」。

可能性を見つめ

ここで注意しなければならないことがある。第一、第二の自然の順序を過らないことである。第一の自然の上に第二の自然があるのであって、第二の自然だけがひとりたびぬけて存在すると思えるのは、極めて不自然で、あってはならない。

お年よりがここを終の住み処とする老人ホームは、この人間の中の自然をできるだけ豊かに温かく充たす所でなければならぬ。私たちが声を惜しまず語りかけ、支え、看るということは、お年よりの可能性を尊重するという理解があつてこそ、真実でありうる。自己実現に向かう人間の晩年を肅然と感ずればこそである。

長野県で二十余年寮母をされた浅井久江さんが任運荘を訪れて、言っている。

「こちらのお年よりの動きを見てみると、お年よりの力を生かしていることに、一番驚きました。老人ホームの在り方とは、お年よりと職員とが互いに努力しあうことですね」（『おむつ』69頁）。わがホームがそうであるとは、決して思わないが、「老人の力を生かす」という言葉は、老人ホームの最も正しいあり方を指し示している。

任運荘の目標は、お年よりがあるがままに生きる場所と定めている。あるがままとは、お年よりがめざす可能性の姿のままであり、それに沿うて私たちが動くことである。可能性のない

人はいないはずだからである。

(3) ふつうの人たちの死

自分を越えたもの

対談中の私の考えに対して、ある読者から反論がよせられた（上掲誌61年12月号・28頁）。

「人間死ぬまで自分の課題をもつものという（吉田の）考えは全くその通りですが、こういう自覚は老人ホームに入る以前に身につける人は身につけているもので、ホームに入ってから、ただ何となく安楽に生きていたい人に、そんなこと言ってみても仕方がない」。

この人は、人間に自覚的老人とのんびり型老人の二つがあると考えているようだ。それはおかしい。人間は根本的には一つ。「安楽に生きたい」人といっているが、そういう願いこそすべての人間に通ずる人生態度である。己が人生を平安にしめくりたい。―見事な人間目標である。最終目標である。

そのためにこそ、人間は様ざまの努力をしているのではないか。努力とは自分を越える行動である。自分を越えたものとの関わりあいである。自分以外の者といってもよい。それは、ひとによって肉親であり、隣人であり、あるいは神であるかもしれない。あるべき自分であってもよい。平安はそのための努力の上にしか生まれない。

論者は、安楽にしたい老人はそつとしておけ、それがその人の幸せといたいらしい。老衰しきった人を植物的生存として見ているからかもしれない。それではものの上辺しか見えていない。この人には晩年を生きる人間の悲しい願いが見えていない。人間とは今わの際でこそ必死で願ひ求める。

特養で仕事する者であるなら、人間は意識を残す限り、臨終の床での人間の真実の姿に、例外なく襟を正さしめられる場面を、経験するであろう。

自分で締めくくる

ある婦人は自分で用意した白い旅立着に添えて、「この私の若い時の写真を忘れないで棺に入れておくれ。主人は私の若い頃の顔しか知らないから」と。あの世を信じ、若くして死別した夫への愛に生きる。限りなく安楽の中にいた。旅立つ数週間前である。ここに生が明確に結実している。

ある婦人は老衰を意識し出した頃から、寮母を「先生」と呼ぶようになった。傍らの婦人に言っている。「先生と呼ぶと、あの連中よくしてくれるからね」。この晩年へのはからいも己が生と死への準備である。そして、この計算づくめの言葉が本ものになっていった。

ある婦人は危篤から一時蘇ったとき、寮母たちを見回して、「ああ、生きていたんですね。みなさんお世話になりました」といって旅立った。

こうした「往生」の厳肅さ、私はその例外を知らない。もしかりに例外があるとすれば、私たちの目が曇って、例外としてにすぎないだろう。

人間の晩年、終末は、枯れ木の如く消えゆくものではない。自らの全人生を、弱り果てた心身をこめて、それなりに自分でしめくくるものである。

極楽往生

名作『銀の匙』（中勘助著・明治44年）後編十七章の一節、伯母の死の覚悟を描く部分は、読む者を深い感動に導く。ふつうの人たちの死がこんなにも崇高なものであることを、私たちに伝えやまない。自分を永年母代わりに育ててくれた伯母がひとり故郷で果てようとする頃、青年になった作者が訪ねる。

伯母さんは後でさわりはしないかと思うくらいくると働いて用事をかたづけたのち、ひぎのつきあうほど間ぢかにちょこんとすわって、その小さな目のなかに私の姿をしまつてあの十万億土まで持ってゆこうとするかのようにじっと見つめながら四方やまの話をする。私は「そんなに目のわるいのには仕事なんぞしないでも」といってさんざとめたけれど、「なんにもせずとひと様のごやっかいになるが気がせつないで」といってどうしてもきかない。

間もなく床についたが、伯母さんは「おあみだ様にお礼を申しあげると」いって、お仏壇のまえに敬虔にすわって見おぼえのある水晶のじゅうずをつまぐりながらお経をあげはじめた。ちらめくろうそくの光に照らされて病みほうけたからだがひよろひよろと動くようにみえる。影法師みたいになってしまった。お仏壇のとびらをたてて隣りの床にはいりながら「いつやらひどうわずらった時はまあこれがこの世の見おさめかしらんと思ったに、寿命があったとみえてまたこうやって娑婆ふたげになつとるが、この年まで生きたでいとお暇してもええと思つていつも寝る前にはおひざもとへお招きにあずかるようにお願い申しては寝るが……」

「寒いことないかえ、風ひいとくれるとどもならんが」

「朝目がさめるとさいが おお おお また命があったわやあと思つてなも……」

翌朝まだうす暗いうちにたった私の姿を伯母さんは門のまえにしょんぼり立っていつまでもいつまでも見おくっていた。

伯母さんはじきになくなった。

(4) 高僧良寛の死

良寛和尚は古い人に代わって、「み心をなくさめ給え朝な夕なに」と世の人びとにお願いした。良寛自身は、「災難に逢時節あうじせつには災難に逢がよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これ災難をのがるる妙法にて候」と達観していた。良寛にも晩年は病と老衰が訪れる。

七十二歳頃から死ぬ七十四歳の間は激しい下痢に悩んで、「ぬばたまの夜はすがらに糞くそまり明かし あからひく昼は厠かづに走り敢へなく」と、わが境涯をうたっている。いちいち便所へ走っていけないほどの苦しみ、ああ、何とかしてくれ。

長歌ちやうかにもうたっている。「この夜らの いつか明けなん この夜らの 明けはなれなば女来て はり(糞尿)を洗はむ こいまろび(苦しさ)に寝返りをうつ 明かしかねけり ながきこの夜を」 糞尿に汚れ、重篤の危機に、息づかいが胸に迫る。

しかし、良寛にもこの苦悩の晩年を看とるひとがいた。若く美しい法弟子貞信尼がいた。貞信は遺稿『蓮の露』にその師の様子を書きとめている。

「師走の末っ方、俄に重らせ給ふよし人の許より知らせたりければ、うちおどろきていそぎもうで見奉るに、さのみなやましき御けしきにもあらず……」と記し、「いついつと待ちにし人は来たりけり いまは相見て何かおもはむ」(良寛)と、師の心を続けている。

貞信に支えられている良寛の草庵病床に起きる姿がはうふつと見えてくる。完全なる安楽の

境である。師弟の相聞の歌はこう結ばれている。

「かかれば、昼より御かたはらにありて御ありさま見奉りぬるに、ただ日にそへて弱りに弱りゆき給ひぬれば、いかにせむ、とてもかくても遠からずかくれさせ給ふらめと思ふにいとかなしくて、

生き死にの界はなれて住む身にもさらぬ別れのあるぞかなしき（貞信）

御かえし

うらを見せおもてを見せて散るもみじ（師）

こは御みづからにはあらねど、時にとり、あいのたまふいとたふとし」。

「天保二年正月六日遷化　よはひ七十四」と最後の所に記している。

美しい完結である。あえて自作の辞世の歌をあげず、「うらおもてを見せて散る紅葉」の日常歌をかりて辞世の言葉としたのも、完全人らしい。

良寛の死も、ただのひと「銀の匙」の伯母の死も、本質的に異なることはない。